

〔大島特産園芸作物における生産振興技術対策〕

ハスオビエダシャクとチャドクガの発生推移

竹内浩二・嶋田 綾*・林 明彦*・畑 尚子*・嶋田竜太郎・三田一也
(島しょセ大島・*大島支庁)

【要 約】2012年における利島のハスオビエダシャク幼虫は0.48採集数/分/人、トビモンオオエダシャク幼虫0.62と低密度であった。チャドクガの雄成虫はフェロモントラップに6月第6半旬～7月第6半旬、10月第5半旬～11月第4半旬まで捕獲された。

【目 的】

大島管内のツバキは国内でも最大規模の油糧生産があるだけでなく、枝物、苗木としての出荷、観光資源としても最重要の品目である。ハスオビエダシャク幼虫は伊豆諸島のツバキなどで過去に大発生したことが知られ、利島では1972年など大きな被害があった。このため、支庁、町、村と協力して本種の発生量をモニタリングし、計画的な防除対策に活用する。近年多発傾向が続くチャドクガについても同様に、発生量のデータを積み重ねて、発生予察など、防除対策に役立てる。

【方 法】

1. ハスオビエダシャク等の発生量調査(97年～)：毎年5月上～中旬に、島内10地点前後で幼虫の時間単位採集法(3～6名1組で、3～5分間)にて実施した。
2. 大島におけるチャドクガ等の発生量調査(10年～)：チャドクガ幼虫の発生初期の5月中旬に、ツバキの多い地点10ヵ所前後で幼虫の5分間の時間単位採集法により実施。なお、チャドクガについては採集せず、目視でのコロニーの計数とした。
3. チャドクガフェロモントラップによる発生調査(11年～)：本種のフェロモンルアーをSEトラップに粘着板とともにセットし、2011年5月から元町合同庁舎内のツバキに高さ1.5mとなるよう設置し12月第4半旬まで計数した。

【成果の概要】

1. 利島におけるハスオビエダシャク幼虫は12年の調査で0.48(採集数/分/人)、トビモンオオエダシャクで0.62と比較的低密度であった(図1)。90年～01年の多発(防除)期以後、極端に低密度状態であったが、11年からやや増加している。
2. 10年から開始した大島でのチャドクガ(幼虫コロニー)調査では10、12年が約0.05(コロニー/分/人)、11年がその4倍の0.2であった(図2)。
3. フェロモントラップによる調査では、チャドクガ雄成虫の年2回の発生時期が明瞭に認められた。第1世代の捕獲は6月第1半旬～第6半旬、第2世代は10月第5半旬～11月第4半旬までであった。捕獲盛期は、11年の第1世代で7月第3半旬、第2世代が10月第6半旬、12年は7月第5半旬、第2世代が11月第1半旬であった(図3)。
4. まとめ：利島のハスオビエダシャクは90年～01年の多発(防除)期以後、発生は少なく推移している。11年からやや増加しているが、03～11年に引き続き、12年についても薬剤防除が必要な発生密度以下である。チャドクガについてはフェロモントラップとコロニーの調査で発生時期の予察、発生量の予測が今後可能になると考える。

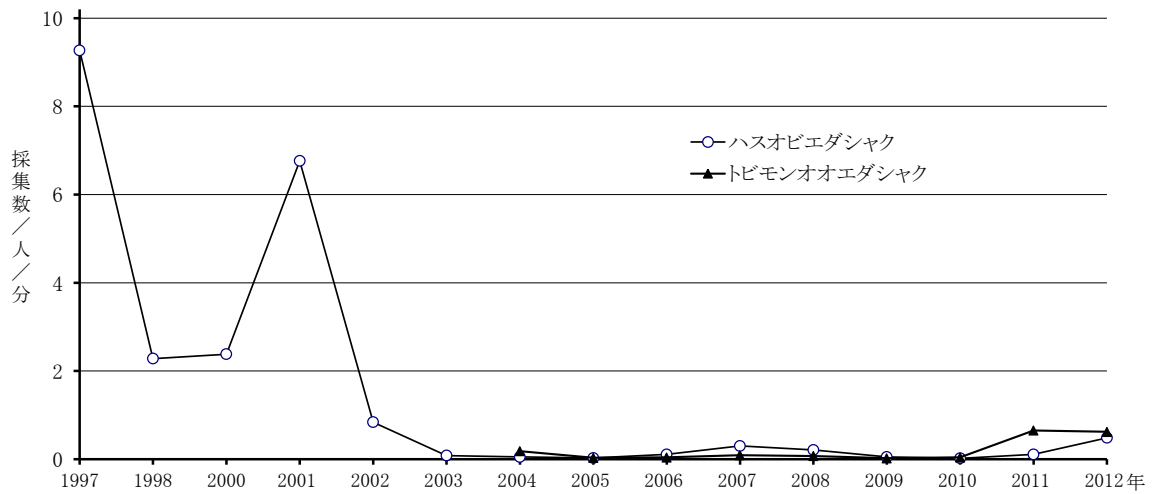


図1 ハスオビエダシヤクとトビモンオオエダシヤク幼虫の密度推移 (利島)



図2 ハスオビエダシヤク中齢幼虫

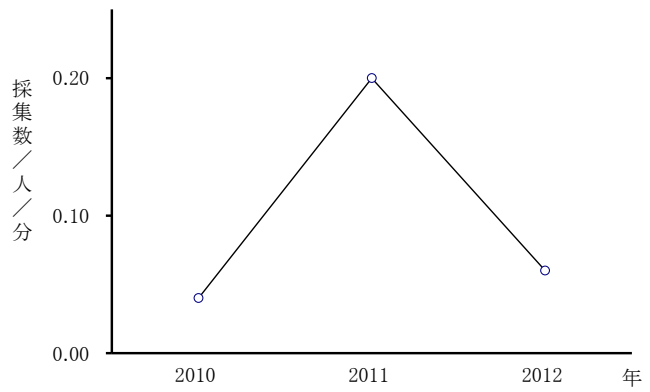


図3 チャドクガ幼虫コロニーの密度 (大島, 5月中旬調査)

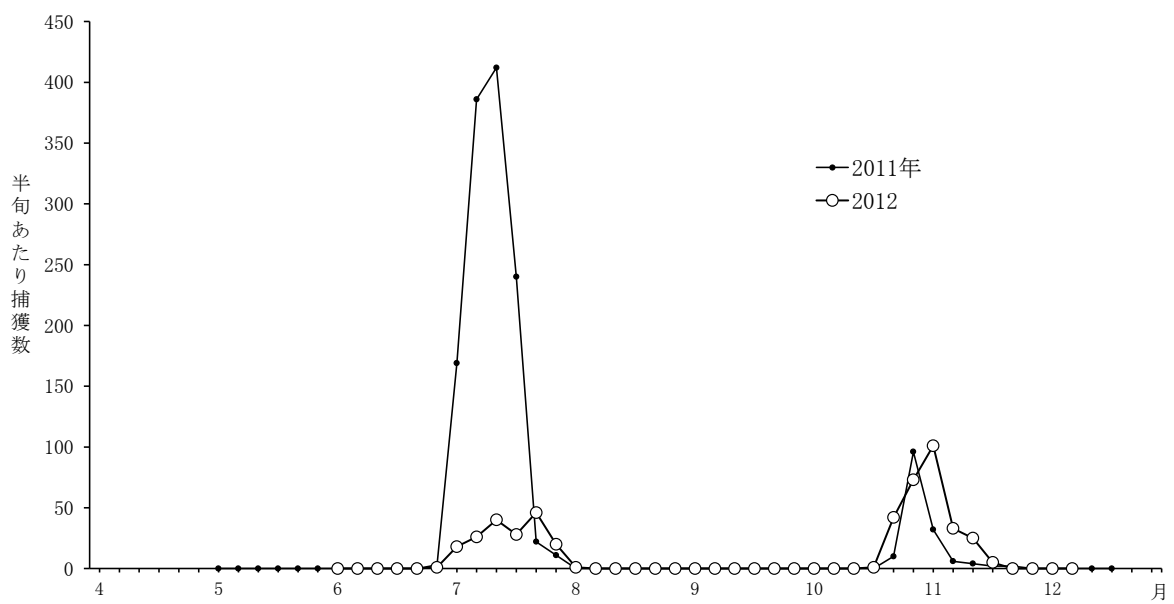


図4 チャドクガのフェロモントラップへの年間捕獲消長 (大島町元町農林合同庁舎)